

初期マルクスの自然価格・市場価格論（つづき Ⅱ）

——『経済学・哲学草稿』「第一草稿」を中心に——

岡 崎 栄 松

目 次

- 〔1〕 はじめに
- 〔2〕 「第一草稿」前段における二つの「自然価格」とそれらの欄配置
- 〔3〕 「第一局面」A「資本の利潤」欄の検討（以上、前々号所載）
- 〔4〕 「第一局面」B「地代」欄の検討（以下、本号所載）
- 〔5〕 「第一局面」C「労賃」欄の検討
- 〔6〕 「第二局面」A「地代」欄の検討——むすび

〔4〕 「第一局面」B「地代」欄の検討

さて、つぎに「地代」欄の内容を検討することにしよう。さきに見ておいたように（本誌第41巻第4号、22ページ、および25-28ページ参照）、この欄ではマルクスは第二の「自然価格」概念、すなわち「十分な価格」=〈資本補填分+平均利潤〉を含意する第二の「自然価格」概念にもとづいて、地代は商品への需要が強くて「通常の価格」が「十分な価格」を越えたさいの「余剰」にほかならないとしていた。

まず「地代」欄の冒頭においてマルクスは、セーの『経済学概論』第一巻から、「地主たちの権利はその起源を掠奪に発している」という一文を引用し（Vgl. MEGA[®], I/2, S. 189. 前掲訳、62ページ。力点はマルクス）、さらに地代の不労所得的な性格を強調して、『諸国民の富』第一編第六章から抜粋しておいた次の一文を転載する。——「地主たちは、すべての人間と同じように、彼らが種

をまいたこともないところで収穫することを好み、そしてその土地の自然的生産物にたいしてさえ地代を要求する」（*MEGA*^②, I/2, S. 189. 前掲訳, 62ページ。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, SS. 341-342.）。

このように、セーヤスミスの言葉を借りて地代の不労所得性^(注)を指摘したマルクスは、さらにすすんで「地代は、その所有者が土地改良のために使った資本の所得にすぎないと考えることもできよう」として、ひきつづき次のように述べる。「……地代が部分的にはそのようなものでありうる場合もある。……しかし地主は、(1)改良されていない土地にたいしてさえ地代を要求する。そして改良費にたいする利子あるいは利得と見なされうるものは、多くはただこの本源的な地代への付加分（追加分）にすぎない。(2)そのうえ、こうした改良は必ずしもつねに地主の基金でなされるのではなく、しばしば借地人の基金によってなされる。それにもかかわらず、借地契約の更新が問題になるとときには、地主は通常、あたかもこれらの改良がすべて彼自身の基金によってなされたかのように、その分だけ地代の引きあげを要求する。(3)いや、それどころか、しばしば彼は、人間の手による最小の改良さえまったく不可能な土地にたいしてすらも地代を要求する」（*MEGA*^②, I/2, S. 191. 前掲訳, 62ページ。(1)(2)……の番号づけはマルクスのもの。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, S. 352.）。

（注）この点にかかわって、マルクスは別の個別では次のようにもいっている。「三つの生産的階級のなかで、地主の階級は、その収入をえるのに労働も配慮も必要ではなく、収入をいわばひとりでに入手し、そのために何の企図も計画もおこなわない階級である」（*MEGA*^②, I/2, S. 193. 前掲訳, 64ページ。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, S. 356.）。

このようにマルクスは、地代そのものと、地主が「土地改良のために使った資本の利得」とは明確に区別しなければならないとして、「改良費にたいする利子あるいは利得」は多くの場合、ただ地代そのもの、または「本源的な地代」への「付加物（追加分）」にすぎないと強調する。そしてマルクスは、「スミスはこの最後の場合〔3〕の例としておかひじき（Seekrapp, salicorne）をあげている」と述べてスミスの次の文章を引いている。

「これ〔おかひじき〕は海草の一種で、焼くとアルカリ性の塩を生じ、それを使ってガラス、石鹼などをつくることができる。それはイギリス、とりわけスコットランドのさまざまな地方に生えるのだが、干潮には現われ満潮（hohe Flut, marée）には隠れる位置にあり、一日二回海水につかるような岩壁にだけ生えるのであり、したがってこの産物は人間の勤労によって、けっして増加するものではない。にもかかわらず、この種の植物が生える地所の所有者は穀物畑と同じように高い地代を要求する」（*MEGA*[®], I/2, SS. 190-191. 前掲訳, 63ページ。Vgl. *MEGA*[®], IV/2, SS. 353-354.）。

このようにマルクスはスミスとともに、地主が「人間の手による最小の改良さえまったく不可能な土地にたいしてすらも地代を要求する」場合として「おかひじき」の例をあげたのち、こんどは「地代は、所有者が借地人にその使用を賃貸している自然力の産物だと見なすことができる」として、ひきつづき次のように述べる。

——「この産物は、この力の大きさに応じて、いいかえると土地のもつ自然的または人為的な豊かさに応じて、大きくもなれば小さくもなるものである。この産物〔つまり地代〕は、人間の所産と見なされうるいっさいのものをさしひいたのちに、またはそれを均衡させたのちに、なお残存する自然の所産である」（*MEGA*[®], I/2, S. 192. 前掲訳, 63ページ。力点はマルクス。Vgl. *MEGA*[®], IV/2, S. 359.）。

さらに——「地代は、ひとがその土地の使用にたいして支払う価格だと見なされるから、当然それは一つの独占価格である。地代はけっして地主が土地に加えた改良に比例するものではなく、あるいは地主が損をしないために受けとらねばならぬものに比例するでもなく、借地農が損をしないで可能なかぎり提供できるものに比例するのである」（*MEGA*[®], I/2, SS. 192-193. 前掲訳, 64ページ。力点はマルクス。Vgl. *MEGA*[®], IV/2, S. 354.）。

こうしてマルクスはスミスとともに、地代は「一つの独占価格」だとして、それは「借地農が損をしないで可能なかぎり提供できるものに比例する」と主張する。これは、しかし、借地農が土地の生産物を、前貸資本（「第四の部分」

も含めて）を回収し、かつ平均利潤を確保する価格、つまり「十分な価格」以上で売ることを意味する。いいかえれば、ここではマルクスは、スミスの所論にしたがって第二の「自然価格」概念にもとづいて地代を説いているわけである。

つづいてマルクスは、「われわれはすでに、地代の量は土地の豊かさの割合に依存することを聞いた」（*MEGA*^②, I/2, S. 193. 前掲訳, 64ページ。力点はマルクス）として、「地代の量を規定するもう一つの契機は位置である」と述べて次のようにいう。

「地代は、土地の生産物がどのようなものであろうとも、その豊かさによって変化し、またその豊かさがどうであらうとも、その位置によって変化する」（*MEGA*^②, I/2, SS. 193-194. 前掲訳, 64ページ。力点はマルクス。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, S. 355.）。

また——「土地、鉱山、漁場が同じ豊かさであるならば、それらの生産物は、その耕作や採取に使用される資本の大きさに比例するし、また同様に資本の使用の仕方の適切さの大小に比例する。同じ資本が同じ適切さで使用されるならば、その生産物は土地、漁場、および鉱山の自然的な豊かさに比例するであろう」（*MEGA*^②, I/2, S. 194. 前掲訳, 64ページ。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, S. 359.）。

ここに引用したスミスの諸章句についてマルクスは次のようにコメントする。——「スミスのこれらの命題は重要である。なぜなら、それらは、同じ生産費と同じ規模の場合には、地代を土地の豊かさの大小に還元しているからである。したがって、土地の豊かさを土地所有者の特性に変えてしまうという国民経済学の転倒が、明白に証明されている」（*MEGA*^②, I/2, SS. 194-195. 前掲訳, 64-65ページ）。

（注）ラービンは例の論文で次のようにいっている。「こうしてマルクスは、対比的分析の第一階程で、資本の利潤について叙述をすすめながら、最初は平行して地代にかんする一連の抜粋をつくっていった（第三欄に）。とはいえこの階程ですでに、第三欄においてもマルクス自身の応答が見いだせるのであって、いくらかも進まないうちに早くもマルクスは、地代の階級の本質にかんする基本的な結論をひきだしている。この時点以後、地代問題の叙述は利潤との直接の関連を失い、

独自のプランにしたがって展開されていく」（*Vergleichende Analyse.*, S. 204. 前掲訳, 109ページ。力点は引用者）。

ここでラーピンが、第一階程の「第三欄」＝「地代」欄においても「マルクス自身の応答」を見いだすことができるという場合、おそらく彼は本文掲載のこの文章を念頭に置いていたものと思われるが、それはともかくとして、ここでラーピンが「地代の階級的本質にかんする基本的な結論」というのが、スミスからのどの抜粋文を指しているのか不明である。いずれにせよ、オリジナル原稿のページがすすむにつれて各欄が他の諸欄との「直接の関連を失い、独自のプランにしたがって展開されていく」ようになるのは、当然のことというべきであろう。むしろラーピンが「地代」欄について、「……マルクスは、対比的分析の第一段階で、資本の利潤の問題について叙述をすすめながら、最初は平行して地代にかんする一連の抜粋をつくっていった（第三欄に）」として、これらの抜粋においては「著者の狙いはまだ明らかでない」とか、「地代」欄冒頭部分の一連の抜粋は「利潤」欄冒頭部分のそれらから「派生してきたもの」だとか解していた（Vgl. *ebenda*, S. 204. 前掲訳, 109ページ参照）ことのほうが問題だといわざるをえない。なぜならマルクスの場合、「地代」欄の冒頭部分でも、第二の「自然価格」概念を基調とするスミス地代論についての抜粋文をむしろ意識的・系統的に抽出・配置していたと思われるからである。この点、ラーピンは、「地代」欄冒頭部分の一連の抜粋文の意味内容を十分にとらえることができず、それらをやや過小に評価していると私には考えられるのだが、どうであろうか。

さてマルクスは、「こんどはわれわれは、地代が現実の交渉のなかで、どのように形成されるかを観察することにしよう」（*MEGA*[®], I/2, S. 195. 前掲訳, 65ページ）といい、さらにつづけて「地代は借地農と地主とのあいだの闘争を通じて確定される。国民経済学では、いたるところで、利害の敵対的対立、闘争、戦争が社会組織の基礎として承認されるの見いだされる」（*ebenda*, S. 195. 前掲訳, 65ページ。力点はマルクス）という。この場合、マルクスが「大綱」におけるエンゲルスの次の文章を念頭に思い浮かべていることは明らかであろう。

「ある特定の生産物について、土地と資本と労働との分け前がどれだけであるかは、まったく決定することができない。これら三つの大きさは対比できないものである。土地は原料をつくりだすが、しかしそれは資本と労働なしにつくりだすわけではない。資本は土地と労働を前提し、また労働はすくなくとも

土地を前提し、たいていの場合に資本をも前提する。これらの三者の機能はまったく別のものであって、ある第四の共通の尺度ではかられるものではない。したがって現在の事情のもとでは、収益を三要素のあいだに分配することになると、それらに内在する尺度はなく、まったく外的で、それらにとって偶発的な尺度、すなわち競争または強者の老獪な権利がことを決する」（MEW, Bd. 1, S. 512.『全集』第一巻、556ページ。力点はエンゲルス、ゴシックは引用者）。

エンゲルス「大綱」から強い影響をうけ、初期エンゲルスの競争論的視角——これは競争の矛盾の視角であると同時に競争現象偏重の視角でもあった——からりカードウの投下労働説＝労働価値説否定に傾斜していた当時のマルクスとしては、「収益を三要素のあいだに分配する」「ある第四の共通の尺度」は存在しないとして、「現在の事情のもとでは」諸階級への「分配」にさいして「ことを決する」のは「まったく外的でそれらにとって偶発的な尺度」つまり「競争または強者の老獪な権利」でしかありえないと考えたのは、やむをえないことだったというほかはない。^(注)

（注） この点の詳細については、さしあたり前記拙稿「初期エンゲルスの価値論および分配論について」（岡崎栄松・大島雄一編『資本論の研究』日本評論社、とくに25～31ページ）を参照されたい。

それはともかくマルクスは、「さてわれわれは、地主と借地農が相互にどのような関係にあるかを見ることにしよう」と述べて、「スマス・ノート」から次の一文を転載する。

「借地契約条件をとりきめるにあたって、地主は、借地農が種子を調達し、労働に支払い、家畜やその他の道具を購入し、そしてさらにその地方での借地農業者の通常利潤を生むような資本、この資本を補填するのに足りるだけしか、なるべく借地農の手もとに残さないよう努める。明らかにこれは、借地農が損をせず満足できる最低の分け前なのであって、地主が彼にそれ以上のものを残そうとすることはめったにない。生産物またはその価格のなかでこの分け前以上に当るものはすべて、その残余がどのようなものであっても、所有者はこれを地代として保留しようと努めるのであって、それは借地農が土地の現状の

なかで、支払いうる最高の地代である。……この剰余分はつねに自然的地代、つまり大多数の地所が自然にその額で貸されるような地代と見なすことができる」（MEGA^②, I/2, SS. 195-196. 前掲訳, 65ページ。力点, ゴシックとも引用者。Vgl. MEGA^②, IV/2, S. 353.）。

われわれがゴシックにしておいた部分から判断すれば、スミスはここでは珍らしく、いわゆるc部分の存在を認めている。そして彼は、生産物価格のうち、前貸資本（流動資本+固定資本）の補填分（摩損したc部分を含む）に「通常利潤」を加えたもの——つまり「十分な価格」を越える「残余」=「剰余分」はすべて「自然的地代」だとする。だから、ここではスミスは第二の「自然価格」概念にもとづく地代論を展開しているわけである。

ここでマルクスは、「土地表面の地代」の量にかんするスミスの見解を転載する。——「土地表面の地代は、ふつうその総生産物の三分の一に達するものと考えられ、しかもこれは、一般に収穫の随時的な変動とは無関係な確定地代である」（MEGA^②, I/2, S. 198. 前掲訳, 66ページ。力点は引用者）。

この文章のうち、われわれが力点を付しておいた部分を、城塚 登・田中吉六両氏の共訳『経済学・哲学草稿』（岩波文庫）は、「……総生産物の三分の一にすぎず」（力点は引用者）云々と訳しているが、これは明らかに、不適訳だといわざるをえない。念のために、この一文についてマルクスによる独訳文と、スミス自身の原文とをそれぞれ示しておけば、次のとおりである。

〈マルクスによる独訳文〉——“Die Grundrente des Oberfläche des Erde beträgt daher meistens …… den dritten Teil des Gesamtprodukts und meistens ist das eine fixe und von den zufälligen Schwankungen der Ernte unabhängige Rente.”（MEGA^②, I/2, S. 198.）

〈スミスの原文〉——“The rent of an estate above ground commonly amounts to what is supposed to be a third of gross produce, and it is generally a rent certain and independent of occasional variations in the crop.”（*Wealth of Nations.*, vol. I, p. 168.）

このどちらの文章からも、「土地表面の地代は、ふつうその総生産物の三分

の「一にすぎず」という訳文が出てくるとは考えられない。むしろマルクスは、土地所有者の寄生的性格には強く反撥していたのであって、むしろ彼は、地代が総生産物の三分の一にも達していること、しかもそれが「収穫の随時的な変動」には左右されない「確定地代」であることに批判的でさえあったのである。

もっとも、この章句は他の邦訳者たちによっても適切には訳出されていないのであって、たとえば、青木書店の三浦訳では「たんに全生産物の三分の一ほどにしかほらず」(『経済学=哲学手稿』90ページ。力点は引用者)となっており、また大月書店の藤野 渉訳の『手稿』では「……その総生産物の三分の一の額に達するだけであって」云々(『経済学・哲学手稿』国民文庫、79ページ。力点は引用者)と訳されている。なおまた、真下信一氏の『全集』版の当該箇所は「……総生産物の三分の一の額にすぎないのであり」云々(『全集』第四十巻、420ページ。力点は引用者)となっている。

ところが、不思議なことに、「第一局面」C「労賃」欄ではすべての邦訳が問題の箇所を適切に訳している。たとえば、岩波文庫版の場合は、「怠惰な土地所有者の地代が、たいていの場合、土地生産物の三分の一に達し……」(前掲訳、25ページ。力点は引用者)といった具合である。これはけだし、前後の文脈からしてこのように訳さざるをえなかったのであろう。

さて、さきにわれわれは、「地代」欄ではミスが第二の「自然価格」概念にもとづいて議論をすすめていることを示す二つの典型的な文章を引用しておいたが、その二つの文章が『経哲草稿』ではこのあとに転載・配置される。すなわち、(i)「土地の生産物のなかで、ふつう市場へもたらされうる部分は、その通常の価格が、それを市場へもたらすために使用された資本を、この資本の通常の利得とともに回収するのに十分な価格だけのものである」(前出)云々という文章と、(ii)「地代は、労賃および利得とはまったく別の仕方で、商品の価格の構成にはいりこむ」(前出)云々という文章がそれである(本誌、第41巻第4号、25-26ページ参照)。

そのあとマルクスは、「食料はつねに地代をもたらす生産物に属している」(MEGA^②, I/2, S. 200. 前掲訳、67ページ。力点はマルクス)として、ひきつづき次

のようなスミスの文章を転載する。

「人間はすべての動物と同様に、その生活維持の手段に比例して増加するものであるから、食料にたいする需要は多かれ少なかれつねに存在する。食料はつねに多量または少量の労働を買うことができるであろうし、また食料をうるために、なにごとかをしようと身がまえている人々は、つねに見いだされるものである。たしかに、食料が買いうる労働は、その食料がもっとも経済的な仕方方で配分された場合に、それによって維持されるはずの労働に、必ずしも等しくはない。それは、労賃が時おり高いためである。しかし食料は、その種の労働がその地方で正常とされている率に応じて、その食料によって維持されうるだけの労働を、つねに買うことができる。土地は、ほとんどどのような位置にあるものでも、この食料をもたらすのに寄与するいっさいの労働を維持するのに必要である以上に、多くの食料を生産する。この食料の剰余は、この労働を活動させている資本を、利得つきで回収してなお余りあるのがつねである。したがって、地主に地代を与えるものが、いくらかはつねに残る」(MEGA[®], I/2, SS. 200-201. 前掲訳, 67-68ページ。力点はマルクス。Vgl. MEGA[®], IV/2, SS. 354-355.)。

ここで地代が、「労働を活動させている資本」を、「利得つきで回収してなお余りある」もの、つまり「十分な価格」を越える「剰余」と見なされていること、そしてこの「剰余」=地代は「食料」の場合には「つねに」存在するとされていることは明らかである。^(注)

(注) 『経済学＝哲学手稿』（青木文庫）の訳者である三浦和男氏は、「地代」欄全体に関して、「この手稿における『地代』の章は、全体をつうじてとくに失敗の大きかった章である」（三浦和男訳・解説『経済学＝哲学手稿』青木書店、1962年、106ページ、注1）と評している。もちろん『経哲草稿』とくに「第一草稿」執筆当時のマルクスは、前述のように、まだ労働価値説に到達していなかったし、支配労働説にもとづく構成価値説のほうに傾斜していたといつてよい。しかし、すでに見たように、そのころのマルクスは、地代については、その不労所得性を初発から見やぶり、〈資本補填分＋平均利潤〉を含意する第二の「自然価格」概念を基調とするスミス地代論に大体において依拠していたといつてよい。前記の

三浦氏の評言は、この点を軽視して初期マルクスの地代論を過少評価しているといわざるをえない。

もっとも、三浦氏も当時のマルクス地代論を一方でこのように否定的に評価しながらも、他方ではそのメリットを次のように認めておられる。

「……にもかかわらず、マルクスが地代をも自覚的徹底性をもって、物的外皮をまわっていとなまれる人間労働の特殊な所産として概念的に把握しようとした点に、この手稿におけるマルクスの功績は存しているのである」（前掲訳、107ページ、注1）。

なお、三浦氏のこうした見解については、小川浩八郎氏の評言も参考にされるべきである（『『経済学・哲学草稿』におけるマルクスの『地代』考察について』《経済学論纂》中央大学、第18巻5号、1977年9月、31-32ページ）。

ところで、マルクスはスミスに拠って次のようにいう。——「地代は、たんにその最初の源泉を食料から引きだすばかりではない。さらに、土地生産物の他の部分が後になって地代を生ずる場合にもまた、地代は価値のその追加を、土地の耕作と改良とを媒介として労働が食料を生産するために獲得したところの力の増大に負っているのである」（*MEGA*^②, I/2, SS. 201-202. 前掲訳、68ページ。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, S. 355.）。「したがって人間の食料は地代を支払うのに十分である」（*MEGA*^②, I/2, S. 202. 前掲訳、68ページ。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, S. 355.）。

つぎにマルクスは、「諸国の人口は、その国の生産物が衣服と住居を供しうる数に比例して増えるのではなく、その国の生産物が食料を供しうる数に比例して増えるのである」（*MEGA*^②, I/2, S. 202. 前掲訳、68ページ。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, S. 355.）というスミスの文章を転載したあとで、ひきつづき「スミス・ノート」から次のように転記している。——「食料につぐ二つの最大の人間の欲求は、衣服、住居、燃料である。それらのものは多くの場合地代をもたらす。つねに必然的にもたらすわけではないが」（*MEGA*^②, I/2, S. 202. 前掲訳、68ページ。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, S. 355.）。スミスからのこの引用文について、岩波文庫の『経済学・哲学草稿』は適切に次のように注記している。「自由な引用であり、そのため二つの欲求と書きながら、〔マルクスは〕衣服、住居のほかにも燃料を加えている」（^(注)前掲訳、256ページ、注20）。

（注） なお山中隆次氏は、城塚・田中両氏の注記を支持して次のように書いておられる。

「〔マルクスの上掲引用文には〕ここの抜粋文にはみられない句が、すなわち『それらのものは多くの場合地代をもたらす。つねに必然的にもたらすわけではないが』の句が記されており、しかも、スミスはこの範疇に入れていない『燃料』も『衣と住』にならんで付記されているので、この後者の引用文は、城塚・田中訳の訳注にもふれているように、『自由な引用』であり、したがって、この引用にさいしマルクスは、この『スミス抜粋』ノートだけでなく、ふたたびテキストの『国富論』仏訳本に立ち戻って、このような『自由な引用』をおこなった公算が大である」（『初期マルクス経済学研究Ⅱ——パリ時代の『スミス抜粋』を中心に（その1）——』前掲誌、167ページ）。

〔5〕 「第一局面」 C 「労賃」 欄の検討

つぎにわれわれは、「第一局面」 C 「労賃」 欄の内容の検討に移ろう。

「労賃」 欄ではマルクスはまず、「労賃は資本家と労働者との敵対的な闘争を通じて決定される。資本家にとっての勝利の必然性〔はどこにあるか〕と問い、それに答えて次のようにいう。——「資本家は、労働者が資本家なしで生活できるよりも長期間、労働者なしで生活することができる。資本家たちの団結は慣習となっており、効果のあるものだが、労働者たちの団結は禁止されており、労働者たちにとって悪い結果をもたらす。そのうえまた、地主と資本家とは、彼らの収入に産業上の利益^{（注）}をつけ加えることができるが、労働者は自分の勤労による所得に、地代も資本利子もつけ加えることができない。それゆえ、労働者たちのあいだの競争はきわめて激しい。このようにして、もっぱら労働者にとってのみ、資本と土地所有の労働との分離は、必然的な、本質的な、しかも有害な分離なのである。資本と土地所有はこの抽象にとどまることを要しないが、労働者の労働はこの抽象にとどまることを要するのである」（MEGA^②, I/2, SS. 189-190. 前掲訳、17-18ページ。力点はマルクス、ゴシックは引用者）。マルクスのこの文章の前半は、『諸国民の富』第一編第八章「労働の賃金」から要約

的に抜粋したものであり、その後半はマルクス自身が書き加えたものであるが、彼のいうように「資本と土地所有と労働との分離」は、「もっぱら労働者にとつてのみ」「必然的な、本質的な、しかも有害な分離」だといわなければならない。

（注）ここでわれわれがゴシック体にしておいた「産業上の利益」とは何を意味しているのであろうか。この点についてマーガレット・フェイは次のように考えている。——「土地所有者と資本家が、そのときどきの収入（地代と利潤）につけ加えるであろうところの、『産業上の利益』の語のもとに、マルクスはここでは明らかに、その唯一の源泉が労賃にあるような、したがってそれ自身は地代や利潤の性格をもっていないような収益（Einkünfte）と解している。この収益はもっぱら、所有者階級が労働者からその所有となるべき賃金の一部をとりあげることによって生じるものである」（Margaret Fay, *Der Einfluß von Adam Smith auf Karl Marx's Theorie der Entfremdung, Eine Rekonstruktion der Ökonomisch-philosophischen Manuskripte aus dem Jahr 1844*. Hrsg. von Johannes D. Hengstenberg übers. aus dem Englischen von Karl-Heinz Benz usw., Frankfurt/New York, 1986. S. 110）。

このように、M. フェイは、上掲引用文中の“industriellen Vorteilen”という語を「賃金の一部」と解するのだが、しかし、当該個所のスミス自身の原文は、次のとおりである。

“A landlord, a farmer, a master manufacturer, or merchant, though they did not employ a single workman, could generally live a year or two upon the stocks which they have already acquired. Many workmen could not subsist a week, few could subsist a month, and scarce any a year without employment.”

「地主・農業者・親方製造業者または商人は、たとえ職人を一人も使用しないでも、すでに獲得しているもろもろの財貨で、一年や二年ぐらいたいてい生活しようと思えばできるものである。多くの職人は、仕事があれば一週間とは生存できないであろうし、一カ月生存できる者は少数で、一カ年生存できる者などほとんどまったくなかろう」（*Wealth of Nations*, vol. I, p. 68. 上掲訳、第一分冊、224ページ。イタリックおよび力点は引用者）。

見られるように、スミス自身は、「産業上の利益」という語で、地主や資本家は「すでに獲得しているもろもろの財貨」を食いつぶして生活しようと思えばできるという「産業上の利益」のことを考えていたのである（この点はエンゲルスの場合も同様であった。拙稿「初期エンゲルスの価値論および分配論について——『国民経済学批判大綱』（1844年）を中心として——」岡崎栄松・大島雄一

編『資本論の研究』33-36ページ参照）。

ちなみに、M. フェイについては重田見一氏の簡潔な文章があるので、それを以下にそのままの形で引くことにしよう。——「フェイは北アイルランドのベルファーストに生まれ、1967年、オックスフォード大学に入学、ついでM. A. の学位をうるためにアメリカのシラキュース大学に赴き、やがてカリフォルニア大学のパークレー校に移った。1974年8～9月、アムステルダムに赴き、同地の社会史国際研究所でフォトコピーにもとづく『経哲草稿』の研究に従事した。1976年には職をえてミュンヘンに移り住み、かたわらルートヴィヒ・マクシミリアン大学の哲学部でヘーゲル、フォイエルバッハを研究した。1979年5月にパークレー校に学位論文を提出したが、翌月死去。死後、学位を授与された」（『経済学・哲学草稿』研究の新動向——フェイ論文を中心に——）《甲南経済学論集》第25巻第4号、1985年3月、88-89ページ）。

なお、わが国で最も早くフェイの業績に注目・紹介されたのは服部文男氏（「マルクス・エンゲルス研究の最近の動向と課題」《経済》1984年1月、のち、これは同氏著『マルクス主義の形成』青木書店、1984年4月に収録）であったが、その後、渋谷 正「『経済学・哲学草稿』とバリ・ノートをめぐる研究の新段階」《経済》1984年6月や前掲の重田論文などの優れた紹介論文が発表された。

1979年5月にパークレー校に提出された「学位論文」の表題はThe 1844 Economic and Philosophic Manuscripts of Karl Marx: A critical Commentary and Interpretation. というのであったが、上掲のDer Einfluß von Adam Smith auf Karl Marx's Theorie der Entfremdung は、J. ヘングステンベルクをはじめ彼女の友人たちによってこの「学位論文」を改題のうえ独訳したものである。現在、これのほうが入手しやすいので、本稿ではこの独訳版を使うことにした。なお、フェイの業績には学ぶべきところが多々あるのだが、本稿では上記の批判点だけをとりあげた。また、フェイの「学位論文」については、山中隆次氏の「マルクス『経済学・哲学草稿』の新解釈によせて——M. A. フェイの『学位論文』——」《商学論纂》中央大学、第29巻第4号、1988年1月が詳しく、かつ有益である。

ともあれ、マルクスは、つづけて次のように述べる。「したがって、労働者にとっては、資本と地代と労働との分離は致命的である。／労賃にとって最低の、どうしても必要な水準は、労働者の労働期間中の生活を維持できるという線であり、そしてせいぜい労働者が家族を扶養することができ、労働者という種族が死滅しないですむという線である。スミスによれば、通常の労賃は、最

低の労賃、つまりむきだしの人間性、すなわち動物的生存にふさわしい労賃である」（MEGA^②, I/2, S. 190. 前掲訳, 18ページ。力点はマルクス, ゴシックは引用者）。

ここでわれわれは、マルクスが賃金の平均率あるいは平均賃金については語らず、「通常の労賃」は「労賃にとって最低の、どうしても必要な水準」つまり「最低の労賃」だとしていることに注意すべきである。そしてマルクスは、この「最低の労賃」は、労働者にとって、その労働期間中の生活が維持でき、せいぜい家族を扶養できて労働者という種族が死滅しないですむという線であり、「むきだしの人間性」あるいは動物的生存にふさわしい「労賃」のことであるという。この場合、マルクスがその「現実的人間主義」の立場から発言していることは明らかであろう。

さらにマルクスは、同じ「現実的人間主義」の立場から次のように主張する。——「あらゆる他の商品の場合と同様に、人間にたいする需要が、必然的に人間の生産を規制する。供給が需要よりはるかに大きいとき、労働者の一部は乞食の状態か餓死におちいる。こうして労働者の生存は他のすべての商品の存立の条件のもとへと引き下げられている。労働者は一個の商品となっており、しかももし自分を売りさばくことができれば、それは彼にとって幸運なのである」（MEGA^②, I/2, S. 191. 前掲訳, 18ページ。力点はマルクス）。

このあと、さきにわれわれが、「労賃」欄のいわば理論的基調をなしているのが第一の「自然価格」概念だとして示した文章、すなわち「……労働者の生活を左右する需要というものは、富者と資本家の気まぐれによって左右される。供給の量が需要を超過するとき、価格を構成する諸部分、すなわち利潤、地代、労賃のうちの一つがその価格〔＝自然率〕以下に支払われ、したがってこれら諸給付のうち的一部分は、そうした使用から引きあげられることになり、こうして市場価格は中心点としての自然価格へとひきよせられる」（前出、力点は引用者）が配置される。しかし、とマルクスはこの一文につづけていう。——「しかし、(1)分業が高度におこなわれている場合は、労働者にとって自分の労働を他の部面へ向けることはきわめて困難であり、(2)資本家にたいする労働者の隷属関係のもとにあっては、まず損失をこうむるのは労働者なのである。／

したがって、市場価格が自然価格へひきよせられるさいに、もっとも多く、また無条件に損をするのは労働者である。そしてまさに自分の資本を他の部面に向けるという資本家の能力こそが、一定の労働部門のなかに拘束されている労働者をして、失業させるか、さもなければ、この資本家のどのような要求にも屈服せざるをえなくさせるのである」（MEGA[®], I/2, S. 192. 前掲訳, 19ページ。力点はマルクス）。

つぎにマルクスは、「市場価格の偶発的・突発的な変動におそわれる度合についていえば、価格のうち利潤と給料とに分解される部分よりも、地代のほうが小さいが、しかし労賃にくらべれば利潤のほうがより小さい」（MEGA[®], I/2, SS. 192-193. 前掲訳, 19ページ。Vgl. MEGA[®], IV/2, S. 343.）と語る。

こうして、マルクスは「市場価格の偶発的・突発的な変動」の影響を受けてもっとも不安定な所得は労賃だとするのだが、すでに「利潤」欄で見たように、彼は、市場価格を自然価格以上につりあげることによって資本家は利潤を普通以上に獲得するけれども、労働者はこの点で資本家とまったく異なっていることを指摘する。

「労働〔者〕は、資本家が儲けるさいには、必然的に儲けるとは限らないが、しかし資本家が損をするさいには、必然的に損をする。こうして、資本家が製造業上の、または商業上の秘密によって、独占とか彼の土地の有利な状態〔特殊な品質の葡萄の産地など〕とかによって、市場価格を自然価格以上にたもつ場合（本誌第41巻第4号、24ページ参照）にも、労働者は何らの利益もえないのだ」（MEGA[®], I/2, SS. 196-197. 前掲訳, 43-44ページ。力点はマルクス。Vgl. MEGA[®], IV/2, S. 344.）。

さらにマルクスは、「労働者は、たんに自分の肉体的な生活手段をうるために争わねばならないばかりでなく、労働を獲得するために、すなわち彼の活動を実現する可能性をうるために、つまりその手段をうるために争わねばならない」（MEGA[®], I/2, SS. 194-195. 前掲訳, 20ページ）と力説する。そのうえでマルクスは、「社会のありうる三つの主要な状態」をとりあげ、そこでの「労働者の状態」を問題にする。そのさい彼は、東インドのベンゴールその他の当時の

イングランドの植民地を、衰退しつつある状態の例として、北アメリカを富国が増進しつつある状態の例として、またシナを、富国ではあるが停滞的となっている例として列挙しながら、とくに第二の「富国が増進しつつある状態」の場合に重点を置きながら、それらの「三つの主要な状態」における「労働者の状態」を特徴づける。

まず、「社会の富が衰退しつつある場合」についてマルクスはいう。——「この場合には労働者をもっとも苦しむ。なぜなら、労働者階級は、幸福な社会状態において有産者階級ほど多くの利益をえられないが、にもかかわらず社会の衰退によって労働者階級ほど苦しむものはないからである」（MEGA^②, I/2, S. 195. 前掲訳、20ページ。力点はマルクス。Vgl. MEGA^②, IV/2, S. 356.）。

つぎにマルクスは、「労働者にとってもっとも有利な社会状態」を問題にしながら、次のようにいう。

「労賃の上昇は、資本家のもつ致富欲を労働者のなかによびおこすが、しかし労働者はこの致富欲を、ただ彼の精神と肉体とを犠牲にすることによってしか、満足させることができない。労賃の上昇は、労働の生産物を、労働者にたいしてますます疎遠なものとして対立させる。分業は人間たちの競争ばかりでなく、諸機械の競争をもひきおこすが、同様にまた、労働者をますます一面的に、そして従属的にする。労働者は機械にまで転落しているから、機械は労働者にたいし競争者として対抗することができる。結局、資本の集積は勤労の量を、したがって労働者の人数を増大させるのであるが、同時にこの蓄積を通じて、同一量の勤労がより多量の製品をもたらす、これが過剰生産となり、その結果は、労働者の大部分を失業させるか、それとも彼らの賃金を悲愴きわまる最低限にまで切りさげるか、どちらかということになる」（MEGA^②, I/2, SS. 200-201. 前掲訳、23ページ。力点はマルクス、ゴシックは引用者）。

さらにまた——「……一方でのこの分業と他方での資本の集積とともに、労働者はますます一途に労働に、しかも特定の、きわめて一面的な、機械的な労働に、依存するようになる。こうして労働者は、精神的にも肉体的にも機械にまで下落させられ、ひとり人間から一個の抽象的活動および一個の胃袋とな

るが、それに応じて彼はまた、市場価格のあらゆる動揺や資本の投下や富者の気まぐれに、ますます左右されるようになる」（*Ebenda*, SS. 196-198. 同上, 21-22ページ。力点はマルクス、ゴシックは引用者）。

このように、マルクスは、「労働者にとってもっとも有利な社会状態」においてさえ、(i)労賃の上昇は労働者の「過度労働」をひきおこし、(ii)それはまた、「労働の生産物を、労働者にたいしますます疎遠なものとして対立させる」ことになる、(iii)分業および資本の集積とともに労働者は「特定の、きわめて一面的な、機械的な労働に、依存する」ことになり、こうして彼は「ひとりの人間から一個の抽象的活動および一個の胃袋となる」ほかはない、と強調する。これはしかし、マルクスが事実上、のちの「疎外された労働」論を早くも展開しているかのようである。そして彼はまた、「第二局面」Bでとりあげるべき問題、すなわち諸資本家間の競争、とくに大資本と小資本との競争の問題をいわば先取りして次のように予測する。「繁栄を増しつつある社会では、ますます、もっとも富める者だけしか生活できなくなる。……中産的資本家の一部が労働者階級に転落するのとまったく同様に、労働者階層の一部は、必然的に乞食状態か飢餓状態に転落する」（*Ebenda*, SS. 198-199. 同上, 22ページ）。

ここで、われわれは「大綱」のエンゲルスが「競争の矛盾」の視角から、諸階級の対立的性格、とくに「競争においては老獪な強者の権利」が勝利することを強調していた文章を想起すべきである。

つぎにマルクスは、富が増進しつつある社会についての上来の説明を要約して次のように書く。——「したがって、労働者にもっとも有利な社会状態のなかでさえ、労働者にとっての必然的な諸結果は、過重労働と早死、機械への転落、労働者に敵対して物騒に集積される資本への隷属、新しい競争、労働者の一部の餓死または乞食化である」（*Ebenda*, S. 200. 同上, 23ページ）。

ところでマルクスは、「しかし、結局のところ、この繁栄状態もいつかはその頂点に達しなければならない」といい、「さて、そのときの労働者の状態はどうであろうか」（*Ebenda*, SS. 201-202. 同上, 23ページ）と問う。

「『その富が最終的に可能な段階にまで達した国では、労賃と資本利子の両方

とも、きわめて低いであろう。職を保持するための労働者間の競争は非常に激しいから、給料は、労働者数をそのまま維持するにたりるだけのところまで切り下げられるであろう。しかもこの国には十分な人口があるわけだから、この労働者数は増大できないであろう』〔スミスからの要約的抜粋〕その上にプラスされる部分は死なねばならないというわけだ」（*Ebenda*, S. 202. 同上, 24ページ）。

富国ではあるがすでに停滞的となっている社会における「労働者の状態」を上のように描いたマルクスは、いわゆる「三状態」のもとでの労働者たちの窮乏を特徴づけて次のように書く。——「こうして、社会の衰退しつつある状態では、労働者の累進的な窮乏が、進歩しつつある状態では錯綜した窮乏が、完成した状態では停滞的な窮乏があるのだ」（*Ebenda*, S. 202. 同上, 24ページ）。

さらにすすんで、マルクスは次のように述べる。——「しかし、スミスによれば、大多数が苦しんでいるような社会は幸福でないのだから、しかも社会のもっとも富んだ状態がこの多数者の苦悩へと向っており、そして国民経済（一般的には私的利害の社会）がこのもっとも富んだ状態へと向っているのだから、したがって社会の不幸が国民経済の目的だということになる。／なおまた、労働者と資本家とのあいだの関係について注意すべきなのは、資本家にとって労賃の上昇は、労働時間の縮減によっておぎなわれてあまりあるということ、また、労賃の上昇と資本利子の上昇とは、商品価格の上に単利と複利とに似た作用をおよぼすということである」（*Ebenda*, SS. 202-203. 同上, 24ページ。力点はマルクス、ゴシックは引用者）。

スミスのこの文章の第一パラグラフについては、『諸国民の富』第一編第八章の次の一文が参考になる。——「成員のはるか大部分が貧しくもみじめであるのに、その社会が隆盛で幸福であるはずも断じてない。そればかりではなく、人民全体を食わせ、着せ、そして住ませる人々が、自分自身もまたかなり十分に食べたり、着たり、そして住んだりしうるだけの、自分自身の労働の生産物の分けまえにあずかるということは、まったく公平というほかはないのである」（*Wealth of Nations*, vol. 1, p. 249. 前掲訳, 第一分冊, 249ページ）。

また、スミスの上掲引用文の第二パラグラフについては、『諸国民の富』第

一編第九章末尾の次の文章が参考になろう。少し長いが重要なので、ここにその全文を引用しておこう。

「実際のところ、高利潤は高賃金よりも所産の価格をはるかに多く引きあげ
る傾向がある。たとえば、かりに亜麻布製造業で働くさまざまな職人の賃金、
つまり亜麻仕上工、紡績工、織布工等々の賃金が、一人のこらず一日につき二
ペンスあがったとすれば、亜麻布一反の価格は、そのために使用された人数と
同じものに二ペンスを乗じ、さらに彼らで使用された日数をこれに剩じた額だ
け高めることが必要であろう。それ自身を賃金に分解する商品の価格部分は、
そのさまざまな製造工程のすべてをつうじて、賃金のこの上昇にたいして算術
級数的割合で上昇するにすぎないであろう。しかしながら、もしこれらの職人
のさまざまな雇主全部の利潤が五分ひきあげられるようなことになれば、それ
自体を利潤に分解する商品の価格部分は、そのさまざまな製造工程のすべてを
つうじて、利潤のこの上昇にたいして幾何級数的割合で上昇するであろう。亜
麻仕上工たちの雇主は、自分の亜麻を売るばあい、自分が自分の職人たちに前
払いした諸原料や賃金の全価値にたいして、五分の追加分を要求するであろう。
さらに、織工たちの雇主は、前払いした亜麻糸と織工たちの賃金との双方のう
えに、同じような五分を要求するであろう。諸商品の価格をひきあげるという
点では、賃金の上昇は単利が負債の累積におよぼすのと同一の仕方で作
用する。利潤の上昇は複利と同じように作用する」(Ibid., pp. 90-100. 同上, 287-288ページ。
力点は引用者。Vgl. MEGA[®], IV/2, S. 351.)

ついでながら、この一文でスミスは「分解する (resolve)」という言葉を知
度か使っているが、このことはしかし、ここでのスミスが分解価値説の立場に
立っていることを意味するものではない。つまり、ここではスミスは、賃金お
よび利潤をともに商品価格の構成要素と解しているのであって、ただ「負債の
累積」にたいして賃金の上昇は「単利」の、また利潤の上昇は「複利」の作用
をおよぼすと主張しているだけのことである。「大綱」から強い影響をうけて
リカードウ投下労働説=分解価値説に消極的な態度を示していた当時のマルク
スとしては、賃金および利潤をともに商品価格の「構成部分」と説くほかなか

ったわけである。

「第一草稿」の「第一局面」C「労賃」欄の末尾でマルクスは、「さて、われわれはまったく国民経済学者の立場にたち、国民経済学者の理論的および実践的な諸要求を比較してみよう」(MEGA^②, I/2, S. 203. 前掲訳, 24-25ページ)と述べて、次のように力説する。

「国民経済学者はわれわれにいう。起源からみても、概念の上からみても、労働者の全生産物は労働者に属するものだ、と。しかし同時に国民経済学者はわれわれにいう。現実には労働者の手にはいるのは生産物のうちの最少部分、まったく必要不可欠の部分だけなのだ、と。すなわち労働者が人間としてではなく、労働者として生存するに必要なだけ、また労働者が人類としてではなく、労働者という奴隷階級として繁殖するのに必要なだけなのだ、と」(Ebenda, SS. 203-204. 同上, 25ページ。力点はマルクス)。

この文章の前半ではマルクスが『諸国民の富』第一編第六章の冒頭部分の諸章句を念頭に置いていることはいうまでもなからう。また、この文章の後半で、「労働者の手にはいる」のは現実には「労働者が人間としてではなく、労働者として生存するに必要なだけ、また労働者が人類としてではなく、労働者という奴隷階級として繁殖するのに必要なだけ」であるというとき、マルクスがその思想上の基本的立場、つまり「現実的人間主義」の立場から発言していることは明らかであろう。

が、さらにすすんでマルクスは、諸所得の量的規定の問題をあらためてとりあげて次のように主張する。

「怠惰な土地所有者の地代が、たいていの場合、土地生産物の三分の一に達し、仕事熱心な資本家の利潤が金利の二倍にさえも達しているのに、一方、労働者が最良の場合に稼ぎうる剰余は、せいぜい彼の子供四人につき二人が餓死しなければならぬ程度の額にすぎない。国民経済学者によれば、労働こそは人間がそれを通じて自然生産物の価値を増大させる唯一のものであり、労働こそ人間の活動的財産である、ということになる。ところが一方、同じ経済学者によると、地主と資本家は、地主と資本家という資格のおかげで、まったく特

権的で怠惰な神々なのであり、いかなる場合でも労働者に優越しており、労働者に法律を押しつけるのである」（*Ebenda*, S. 205. 同上, 25-26ページ。力点、ゴシックとも引用者）。

この文章でマルクスが「労働こそは、人間がそれを通じて自然生産物の価値を増大させる唯一のもの」（力点は引用者）云々という場合、彼はすでに労働価値説に到達しているかのようである。この種の表現は『草稿』『第一草稿』の他のところどころでも見られるが、しかし、このころのマルクスはエンゲルスとともに、まだ支配労働説にとどまっていたのであって、このような表現は、とりわけスミス『諸国民の富』からたんに言葉としてはいり込んだものとするべきであろう。ただし上掲の一文で地主と資本家のことを「まったく特権的で怠惰な神々」と呼んでいることから明らかなように、当時のマルクスは、地主と資本家とを同類と見て、その両階級のいわば経済的支柱が労働者なのだと考えていたように思われる。いいかえれば、そのころのマルクスは、まだ労働価値説には到達してなかったけれども、しかし、とくにエンゲルスの「競争の矛盾」の見地に助けられて、労働者の所得である賃金は必要生産物、他方、資本家や地主の所得である利潤および地代は剰余生産物としてとらえていたのであった。^(注)

（注） この点については同じ「労賃」欄次の文章が参考になる。——「概念の上でいえば、地代と資本利得とは労賃から差引かれる諸控除である。しかし現実には、労賃は土地と資本とが労働者に引きわたす一つの控除であり、労働者への、労働への、労働生産物の譲与である」（*Ebenda*, S. 207. 同上, 27ページ。力点はマルクス）。

なお、この点の詳細は、前記拙稿、とくに「五 初期エンゲルスの分配論」（岡崎・大島編『資本論の研究』所収, 31-39ページ）を参考されたい。

ところでマルクスは、「第一局面」C「労賃」欄の最終部分で、労働者の利害と社会の一般的利害との関連について次のように言明する。

「国民経済学者によれば、労働者の利害は社会の利害にけっして対立するものではないのに、社会はつねに、そして必然的に労働者の利害に対立するのだ」（*MEGA*[®], I/2, S. 206. 前掲訳, 26ページ）。

この場合、マルクスは、労働者の利害はけって社会の利害に対立しない理由として、労賃の上昇は、それが「労働時間の量の縮減」によって「おぎなわれて余りある」からだという点を挙げている（Vgl. *ebenda*, SS. 20-21. 同上, 26ページ参照）が、ここで「労働時間の量の縮減」というのは、あらためていうまでもなく、生産力の上昇によって生産量が大幅に増加するとともに個々の商品の生産に要する「労働時間」が短縮され、こうして、いわゆるコスト・ダウンによる超過利潤が発生する、という事態を指しているものと思われる。この場合には、スミスとともにマルクスは、事実上、投下労働説の見地に立っていると見てよからう。

それはともかく、「第一局面」C「労賃」の最終部分でマルクスはさらに次のようにいう。

「衰退しつつある社会状態においては、労働者はもっともひどく苦しむ。労働者は社会の情勢のおかげで圧迫一般をうけるばかりか、労働者としての彼の地位のおかげで特別に重い圧迫をうけるのだ。／しかし、進歩しつつある社会状態においては、労働者の没落と貧困化は、彼の労働の産物であり、彼によって生産された富の産物である。窮乏、それはこうして今日の労働そのものの本質から生ずるのだ。／もっとも富裕な社会状態、それは一つの理想、だがしかし近似的にしか達せられない理想であり、少なくとも市民社会の目的であると同時に国民経済学の目的でもあるものなのだが、それは労働者にとっては停滞的な窮乏なのだ」（*Ebenda*, SS. 207-208. 前掲訳, 27ページ。力点はマルクス）。

こうして、「窮乏」は偶然に発生するものではなく、「今日の労働そのものの本質」から発生するという点を力説したうえで、なおかつマルクスは、その思想上の基本的立場、すなわち「現実的人間主義」の立場から次のように強調する。

「国民経済学がプロレタリアを、すなわち資本も地代ももたず、もっぱら労働によって、しかも一面的・抽象的労働によって生活するひとを、ただ労働者としてだけ観察しているということは、おのずから明らかである。それだから国民経済学は、労働者はすべての馬とまったく同様に、働くことができるそれ

だけのものは稼がなければならない、といった命題を立てることができるのだ。国民経済学は労働者を、その労働していないときに、つまり人間として観察しないで、こうした観察は、刑事裁判に、宗教に、統計表に、政治に、乞食取締り巡査にまかせるのだ」（*Ebenda*, S. 208. 同上, 27-28ページ。力点はマルクス）。

ここには、「現実的人間主義」をその思想上の基本的立場とする若きマルクスの面目躍如たるものがある、といえよう。

〔6〕「第二局面」A「地代」欄の検討——むすび

この「第二局面」A「地代」欄の部分をマルクスは、「さて、われわれは、地主がどのようにして社会のすべての利益を収奪するかを見ることにしよう」と書きはじめて、「(1)地代は人口とともに増大する。(2)……地代は鉄道等々とともに、交通手段の改善や複雑化とともに高まる。……」（*MEGA*®, I/2, SS. 208-209. 前掲訳, 69ページ）と述べ、さらに「スミス・ノート」から次のような所説を引用・採録する。

「(3)社会状態のあらゆる改良は、直接にか間接にか地代を高め、土地所有主の実質的富を、すなわち他人の労働またはその生産物を買う力を増大させる方向に働く。……土地と耕作との改良が進むと、それは直接にこの方向にむかって働くのである。生産物にたいする所有主の分け前は、生産物の増加とともに必然的に増大する。……この種の原料の実質価格の上昇、たとえば家畜の価格の上昇もまた、地代を直接に、しかもいっそう大きい割合で高くする傾向もっている。地主の分け前の実質価値、この分け前が彼に与える他人の労働にたいする実質的な力が、生産物の実質価値とともに必然的に増大するばかりではなく、総生産物にたいする彼の分け前の量の割合もまた、この価値とともに増大するのである。この生産物の実質価値が上昇した後でも、この生産物を供給するために、また使用された資本をその通常の利得とともに回収するためには、けっしてより多くの労働を必要とするわけではない。したがって、地主に属す

る生産物の残余の部分は、総生産物との関係において、以前よりもはるかに大きくなるであろう」（*Ebenda*, SS. 209-210. 同上, 69ページ。力点はマルクス。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, S. 356.）。

「スミス・ノート」からのこのような抜粋につづけてマルクスは、「粗生産物にたいする需要の増大、したがってまた価値の上昇は、一方では人口の増大から、また彼らの諸欲求の増大からひきおこされうる。だが、今まで全然もしくはわずかしが使われなかった原料によって製造をおこなういっさいの新発明、いっさいの新しい応用は、地代を増大させる。こうして、たとえば炭坑の地代は、鉄道、蒸気船などとともに途方もなく高まった」（*MEGA*^②, I/2, S. 210. 前掲訳, 70ページ）と書き、さらに彼は、「地主が製造、諸発見、労働から引きだすこの利益以外に、われわれはただちにもう一つの利益を見るであろう」（*Ebenda*, S. 210. 同上, 70ページ）として「スミス・ノート」から次の一文を転載する。

「(4)製造業生産物の実質価格の引き下げを直接の目的とするところの、労働の生産力における諸種の改善は、間接には実質的地代を高める傾向をもつ。すなわち地主は、自分の原料のなかで自分の消費をこえる部分を、あるいはこの部分の価格を、製造業生産物と交換する。第一の種類〔すなわち製造業〕の生産物の実質価格を減少させるすべてのものは、第二の種類〔すなわち地主〕の生産物の実質価格を増大させる。それ以後は、同量の粗生産物がいっそう大量の製造業生産物の等価となり、そして地主はいっそう多量の便益品、装飾品および贅沢品を入手できるようになる」（*MEGA*^②, I/2, SS. 210-211. 前掲訳, 70ページ。Vgl. *MEGA*^②, IV/2, S. 356.）。

この文章についてマルクスは、こういうコメントをつけている。——「ところで、スミスは、地主が社会のすべての利益を収奪するということから、地主の利益はつねに社会の利害と一致する、と結論しているが、それはばかげたことである。私有財産の支配下にある国民経済にあっては、高利貸が浪費者にたいしてもつ利害はけっして浪費者の利害と一致しないのと同様に、ある個人が社会にたいしてもつ利害は、社会が彼にたいしてもつ利害とまさに反対の関係

にたつのである」（MEGA[®], I/2, S. 211. 前掲訳, 70-71ページ, 一部既出。力点は引用者）。

（注） げんにスミスは、『諸国民の富』第一編第十一章「土地の地代について」の「本章の結論」で次のようにいっている。「これら三大階級〔地主・労働者・資本家〕の第一のもの〔つまり地主階級〕の利害は、……社会の一般的利害と緊密にしかも不可分にむすびついている。一方を促進または阻害のいずれかするものはおよそどのようなものでも、必然的に他方を促進または阻害する。公共社会が商業または行政についてのある規制にかんして審議する場合、土地所有者は、すくなくとも彼らが自分自身の階級の利害についてかなりの程度の知識をもっているかぎり、自分たちの特定階級の利益を促進しようという目的から公共社会を誤導することはけっしてありえない」（*Wealth of Nations*, vol. I, p. 248. 前掲訳, 第二分冊, 217ページ。力点は引用者）。

このようにマルクスは、地主の利害と社会の一般的利害とはつねに一致するというスミス地代論の「結論」には、きっぱりと反対するのである。マルクスの考えでは、社会の一般的利害と一致するのはただ労働者階級の利害だけなのである。そこで彼は「第二局面」Aの「地代」欄を次のような文章で結んでいる。——「こうして地主の利害は、社会の一般的利害と一致しているところか、借地農、農僕、製造業の労働者および資本家の利害と敵対的な対立関係にたっているのだが、さらにある一人の地主の利害は、われわれがつぎに観察しようと思う競争のために、他の地主の利益とさえもけっして一致しないのである」（MEGA[®], I/2, S. 213. 前掲訳, 72ページ）。

要するに、「第一草稿」のマルクスは、「地主が社会のすべての利益を収奪する」ということから、「地主の利益はつねに社会の利害と一致する」との結論を引きだすスミスには強く反対して、「地主の利害は、社会の一般的利害と一致しているところか、借地農、農業、製造業の労働者および資本家の利害と敵対的な対立関係にたっている」こと、さらになお、「ある一人の地主の利害は、……競争のために、他の地主の利害とさえもけっして一致しない」ことを力説するのである。



以上、われわれは、「第一局面」A「資本の利潤」欄から「第二局面」A「地代」欄に至るまでの自然価格・市場価格論をマルクスの基本的立場、すなわち「現実の人間主義」および彼の競争論的視角——これはエンゲルス「大綱」からマルクスが学びとった視角であって、競争現象重視の視角であるとともに「競争の矛盾」の視角でもあった——との関連で考察してきた。そこでわれわれは、上乗の検討結果をここで簡単に約言することにしよう。

(1)初期マルクスの「自然価格」概念は二重であって、彼の自然価格・市場価格論においては、スミス『諸国民の富』第一編第七章で詳論されている第一の本来的な「自然価格」(= \langle 平均賃金+平均利潤+平均地代 \rangle)が市場価格の変動の重心点となるという見解と、「通常の価格」が強い需要により「十分な価格」(つまり、第二の「自然価格」= \langle 資本補填分+平均利潤 \rangle)を超過したさいの剰余分が地代だとする見解——これは『諸国民の富』第一編第十一章になって現われる——とが継承されている。(2)これら二つの「自然価格」概念のうち、『経哲草稿』「第一草稿」の「利潤」欄、「労賃」欄では第一の「自然価格」が、また同じく「地代」欄では第二の「自然価格」が、それぞれ基軸概念の役目を果たしている。(3)この二つの「自然価格」概念は、後年、マルクスその人が『剰余価値学説史』で明らかにしたように (Vgl. *Theorien über den Mehrwert*, MEW, Bd. 26, Teil II, SS. 350-352. 『剰余価値学説史』, 『全集』第26巻第2分冊, 463-466ページ参照), もともと互いに相容れない性格のものであるが、「第一草稿」執筆当時のマルクスは、利潤および地代と、賃金との区別ないし相違を強調することによって諸階級の社会的地位の相違を解明しようとしていた。(4)そのさいマルクスは、スミスとともに賃金の上昇は「負債の累積」にたいして「単利」の作用を、他方、利潤の上昇はそれにあたいして「複利」の作用をおよぼすと力説した。

(5)こうして「第一局面」のA, B, Cおよび「第二局面」Aをつうじマルクスは、エンゲルスの「競争の矛盾」の視角を援用しつつ、(i)資本家階級の利害

は「社会の一般的利害」と一致することはなく、むしろ「しばしばそれに敵対的に対立してさえいる」、(ii)「地主の利害は、社会の一般的利害と一致しているところか、借地農、農僕、製造業の労働者および資本家の利害と敵対的な対立関係にたっていること、(iii)「国民経済学者によれば、労働者の利害は社会の利害にけっして対立するものではないのに、社会はつねに、そして必然的に労働者の利害に対立する」といった諸事情を明らかにしたのであった。(6)そして「第一草稿」におけるマルクスは、まだ労働価値説や剰余価値説に到達していなかったにもかかわらず、エンゲルスの「競争の矛盾」の視角を採用することにより、労働者の所得である賃金はいわば必要生産物として、また他方、資本家および地主——彼らは「まったく特権的で怠惰な神々」である——の収入である利潤や地代は剰余生産物として把握していたのである。

そしてこうした諸点に、われわれは、『経済学・哲学草稿』「第一草稿」前段で展開された初期マルクスの自然価格・市場価格論の主要なメリットがあったと見ることができよう。